十重二十重のまち金沢
新都心軸デザインコンペティション２０２２
を踏まえた
金沢のまちづくりに関する答申書

公益社団法人金沢青年会議所

目次

Ⅰ　金沢のまちづくりに関する答申.....2

Ⅱ　事業実施背景と目的.....3

Ⅲ　デザインコンペティションの概要・応募状況.....4

Ⅳ　審査体制.....5

Ⅴ　受賞作品紹介.....6

Ⅵ　その他一次審査通過作品紹介.....12

Ⅶ　事業風景.....13

Ⅷ　審査を終えて.....15

Ⅸ　市民の声・アンケート結果.....16

Ⅹ　総括.....19

Ⅰ　答申内容

公益社団法人金沢青年会議所は、金沢のまちづくり、特に金沢の都心軸を起点とした中心市街地の未来構想の方針として以下の通り答申する。

1．金沢市、金沢市民にとって幸せな未来はどういったものか。その未来を実現するために必要な金沢のまちのあり方とは何か。具体的なエリアマネージメントとは何か。これらを包括して考察していくための、未来への意思を内包するビジョン策定の機会を産官学連携のもとに設ける。

2．現代的な建物が立ち並ぶ都心軸においても、金沢独自のまちの魅力を失ってはいけない。金沢やそれぞれの場所に積み重ねてきた歴史・文化を背景とした建築や公共空間が構想されるよう、金沢の歴史・文化を学び、まちへの誇りと愛着を涵養していく機会を産官学連携のもとに開催する。

3．未来へのビジョン、金沢の歴史性・文化的な背景の読み込み、これらに重きを置いたまちづくりの実現のために現行規制の見直しや事業主や地権者に対して経済的な合理性が担保されるよう、未利用容積率・未利用建蔽率に対する助成金制度や区分地上権売買による容積率移転を促す制度等が求められる場合がある。金沢らしいまちづくりを行うために、必要な条例整備等を積極的に実施する。

Ⅱ　答申に至る経緯

公益社団法人金沢青年会議所は「個人の修練、社会への奉仕、世界との友情」を活動の軸として、明るい豊かな社会の実現を目指し、金沢のまちとそこで暮らす人々の未来のために活動している。２０２２年度設置されたかなざわの経済活性化委員会では、「都心軸の更なる発展のための調査・研究」をテーマとし、金沢のまちづくりの歴史を調査し、金沢市内に設けられている建物の高さ制限の撤廃が金沢にどのような影響を与えるかを研究した。高さ制限が金沢の特色である景観保持に多大なる影響をもたらしていることから、あえて「高い建物が金沢の新たな景観的価値になるのではないか」という仮説を立て、全国からアイディアを求めるデザインコンペティションを開催した。コンペティションの結果を検証し、今後金沢がどのようにまちづくりに取り組めばいいのかを、答申書としてまとめ、ここに報告するものである。

本答申書は次項より、金沢の都市景観保全の歴史と課題、コンペティション概要、コンペティション結果とその検証、総括の順で掲載する。

Ⅰ　金沢市の都市景観保全の流れ

江戸期の庭園、町屋、社寺、洋風建築、大正・昭和期のモダン建築、再開発ビル、そして現代の金沢２１世紀美術館、金沢駅。各時代の都市資産が蓄積してきた歴史的重層性が金沢のまちの重要な個性の一つである。さらに、文化やまちに対する市民意識が暮らしのなかに息づき、金沢特有の風景を構成している。このような都市に金沢が成長してきた経緯として、金沢市の様々な取り組みが礎となっている。

その起点となったのは、高度経済成長期、谷口吉郎氏（東京工業大学名誉教授）を中心とする有識者が「金沢診断」を実施し、「金沢市伝統環境保存条例」が制定・施行されたことに始まる。同条例は、金沢固有の自然環境や歴史的建造物等の価値に目を向け、その保存に大きな役割を果たした。平成４年（１９９２年）には「金沢市都市景観形成基本計画」が策定され、「保存と開発の調和」を掲げた景観形成の基本的方針と方策を明らかにした。また、建築物等の位置・高さ・形態・彩色・広告物等に関して基準を設けた。特に建築物の高さについては具体的数値で示された。

さらに、景観という言葉・概念を広く市民に理解してもらうため、景観に対する市民の関心を高める活動を金沢市は行ってきた。その代表例が、昭和５３年（１９７８）に創設された「金沢市都市美文化賞」である。都市景観に対する美意識を市民・事業関係者が深め、金沢らしい景観形成を図ることを期待して創設された。この金沢都市美文化賞は地元経済団体が主体となり実施されていることも特徴である。

Ⅱ　金沢市の課題と解決への道筋

良好な景観を形成するために制定・施行された各条例は、金沢の景観保全を推進し都市そのものの魅力を高めてきた。一方、制定から約３０年が経過し金沢を取り巻く環境は変化を遂げてきた。特に、ほぼ市内全域に導入されている建造物の高さ制限により老朽化した建物の建て替えが困難となり、新たな開発の進捗が進まない現状を生んでいる。条例を含め、現状の課題は様々な要因が起因しているが、市民がこれらの課題に対して自身の意見を持って向き合っているのであろうか。言うまでもなく、金沢の特徴である歴史的重層性や景観保全は各時代のなかで住み暮らす市民一人ひとりの持つ価値や意見を基に幾重にも議論を重ねてきた結果である。そうであるからこそ、現在金沢が抱えている諸課題を解決するには、今に住み暮らす金沢市民一人ひとりが金沢の未来を考え、まちづくりの主体者意識を高めることが必要である。

そこで私たち金沢青年会議所では、市民が景観保持と経済発展のバランスを考え、これからのまちづくりに対する主体者意識を醸成することを目的としてコンペティションを開催した。これは、金沢における都市景観、特に建物の高さ制限に対し、規制を超える高層建築物が金沢の景観的価値を阻害するものではなく新たな景観的価値になるのではないか、という仮説のもと、金沢において美しい景観の保全と経済的活動が両立するまちづくりを行うために、金沢の歴史的重層性を継承しつつ、人々の交流、文化・経済の活性化をはかりながら新しい価値を金沢に創造する、３０年後の都市像を具体的に市民に提示するものである。また、コンペティションの結果を検証・総括し、未来の金沢のまちづくりに関する答申としてまとめる。

■コンペティション名称
十重二十重のまち金沢　新都心軸デザインコンペティション２０２２

■主催者・事務局
＜主催者＞
公益社団法人　金沢青年会議所
＜事務局＞
２０２２年度かなざわの経済活性化委員会

■目的
金沢は「保存と開発の調和」をまちづくりの方針に据え、市民が主体となって景観・まちなみの保全を行う都市でありながら、中心市街地においては閉店する店舗などが増加し、土地活用が思うように進まない現状がある。そこで「歴史的価値の継承と新たな形の創造の都心軸開発」をテーマに、既存の都市計画・規制にとらわれない、柔軟な発想によるアイディアを募集する。
停滞する金沢の再開発に一石を投じ、市民とともに「金沢らしい景観の在り方」を考え、未来の金沢に相応しい空間を創造するためのコンペティションである。

■応募・審査スケジュール
・エントリー期間　２０２２年6月２０日（月）～7月３１日（日）
・作品提出締切　２０２２年9月　7日（水）
・一次選考　２０２２年9月１５日（木）
・市民展示会　２０２２年9月２１日（水）～9月２２日（木）
・WEB 展示　２０２２年9月１９日（月）～9月２８日（水）
・本審査・講評会・表彰　２０２２年9月３０日（金）

■応募状況
・エントリー　３２件（石川県内　７件／石川県外　２５件）
・提出作品　１１作品（石川県内　３作品／石川県外　８作品）
・一次選考通過作品　６作品（石川県内　２作品／石川県外　４作品）

■審査体制

審査においては、二段階で審査を行った。金沢青年会議所執行部による一次審査を行い、本審査・講評会に進む６作品を選定した。一次審査通過作品においては、金沢駅東もてなしドーム地下広場および公益社団法人金沢青年会議所公式ウェブサイトでの一般市民による投票の後、金沢市アートホールにて建築の専門家２名を含む審査員５名による審査・講評を行い、最優秀賞・優秀賞・理事長賞の３作品を選考した。

■審査員

石上 純也 氏（株式会社石上純也建築設計事務所 代表）

日本のみならず世界で活躍する建築家。日本建築学会賞、第１２回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、毎日デザイン賞、Obel Award など建築に関して多く受賞。主に金沢における未来の建築、都市像の観点から審査・講評。

宮下 智裕 氏（金沢工業大学建築学部建築学科 教授）

地方創生、意匠設計、建築構法、リノベーションを専門。金沢市の景観、まちづくり、環境、広告物などの施策に数多く関わる。また、建築家を志す若手の育成にも注力。地元金沢の景観や歴史的背景の見地から作品を審査・講評。

三浦 崇宏 氏（The Breakthrough Company GO 代表取締役）

社会の変化と挑戦にコミットすることをテーマに株式会社 GO を設立。日本 PR 大賞ほか、クリエイティブの分野において多数の賞を受賞。自他共に認める大の金沢ファン。金沢を外から見た視点、これからの金沢に期待するところなどの観点から審査・講評。

上田 利恵 氏（株式会社東京リエ・コーポレーション代表取締役社長）

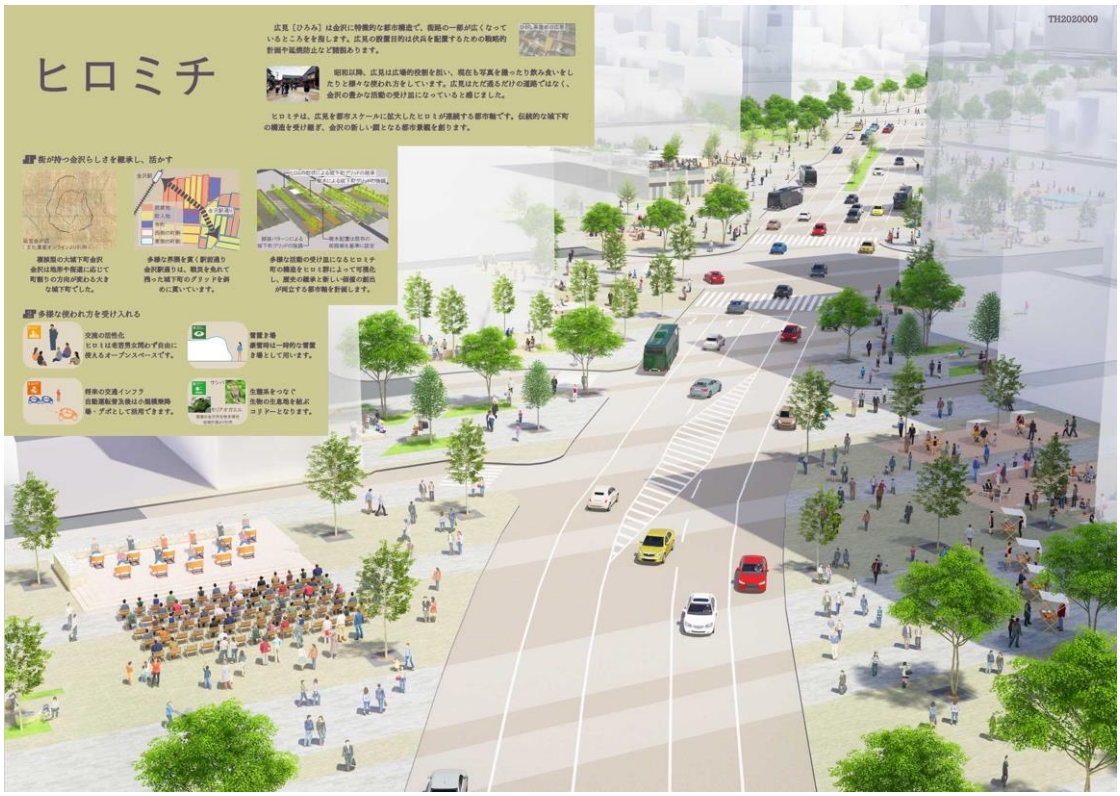
金沢の中心部で、長年様々な文化や経済界の社交場として親しまれる店舗を経営。ご自身も金沢経済同友会、金沢商工会議所の活動にも参加、金沢の女性経済人の先駆者。金沢の経営者の視点、人と人との交流に関わる視点などから、作品を審査・講評。

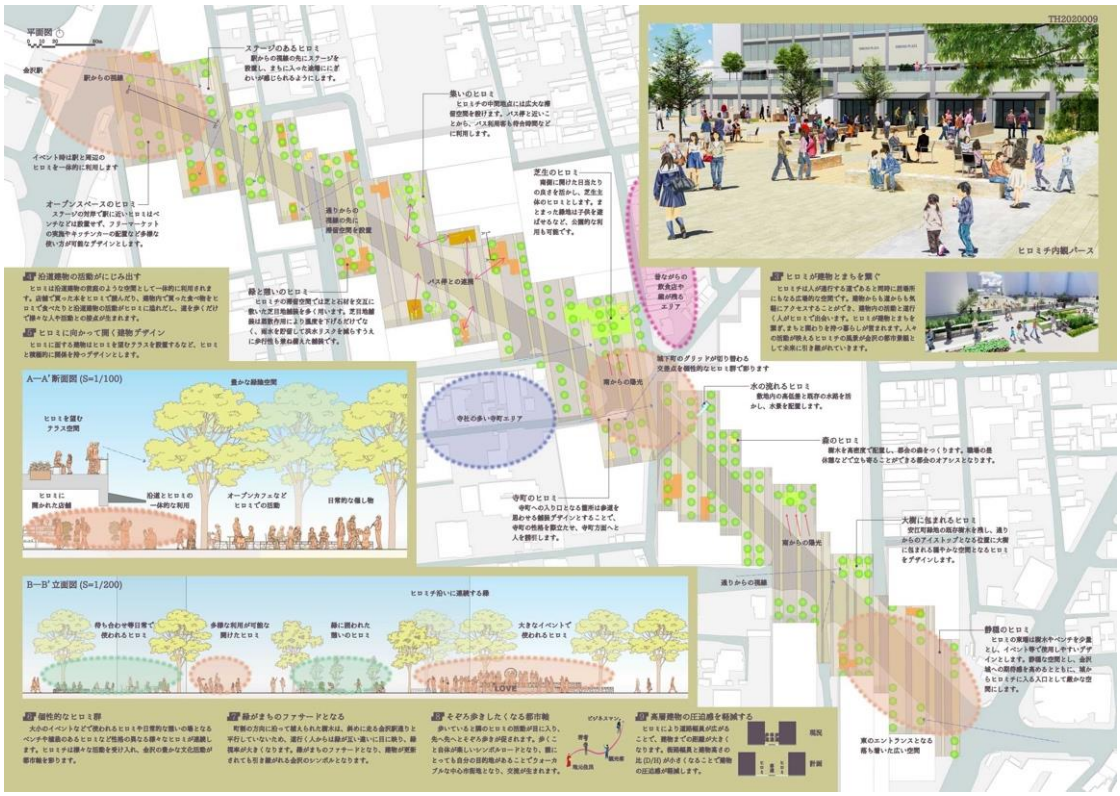
田辺 佑一 君（公益社団法人金沢青年会議所 ２０２２年度副理事長）

２０２０年みなと未来創造委員会委員長として、コロナ禍において人々が希望と挑戦を抱き住み暮らすことのできる金沢を描くことに尽力し、本業でも建築業界に携わる。金沢青年会議所を代表し、新しい時代の金沢がどうあったらいいかという視点から作品を審査・講評。

■最優秀賞

作品名　「ヒロミチ」





■作品概要

歴史的な価値の継承と人・モノ・情報が集まる魅力的な都市軸の創出を両立する広場的街路・ヒロミチを提案する。対象地は戦災を免れて引き継がれてきた城下町由来の町割を都市計画道路・金沢駅通りが斜めに貫く特徴的な成り立ちの場所だ。このような場所の個性を活かし、まちの基盤である道路のあり方を変えることで、沿道の建物と相乗効果を発揮して魅力的な都市軸をつくることができると考えた。

街路の一部が広くなった箇所「広見」は金沢独自の都市構造だ。広見は通過する場所としての機能と滞留空間としての機能を併せ持った道路空間だ。通路でもあり広場でもある「広見」を都市スケールに拡大した「ヒロミ」が連続する「ヒロミチ」は金沢の多様な活動の受け皿となる。ヒロミは城下町の町割りグリッドに合わせることで、城下町以来の伝統的な都市構造を継承する。これにより城下町の町割りを斜めに貫く金沢駅通りの特殊性が強調され、軸性が強まる。緑と活動で彩られるヒロミ群がまちのファサードとなり、金沢の新たな顔となる都市景観が実現する。

■作品提出者

氏名：松野 祐太 氏

所属：小野寺康都市設計事務所

■受賞理由・審査員講評

＜石上 純也 氏＞

着眼点が面白い。アイディアの骨格である、道に対して雁行するように建物が建つのは、世界中どのまちにも今まで無い。何気ないアイディアのように見えるが、都市のまちなみとしては出来上がったらすごく面白いものになる。一方でもう少し磨き上げていけるし、これが実際に出来たら今までなかったような都市景観が見られるようになるという期待を込めて選定した。

＜宮下 智裕 氏＞

こういう場所ができたら面白いのではと思った。都市構成が非常に明解に出ていて、着眼点が面白い。ただ、具体的な使い方・濃淡も含めたプログラムの在り方が具体的に示せると更に良い。

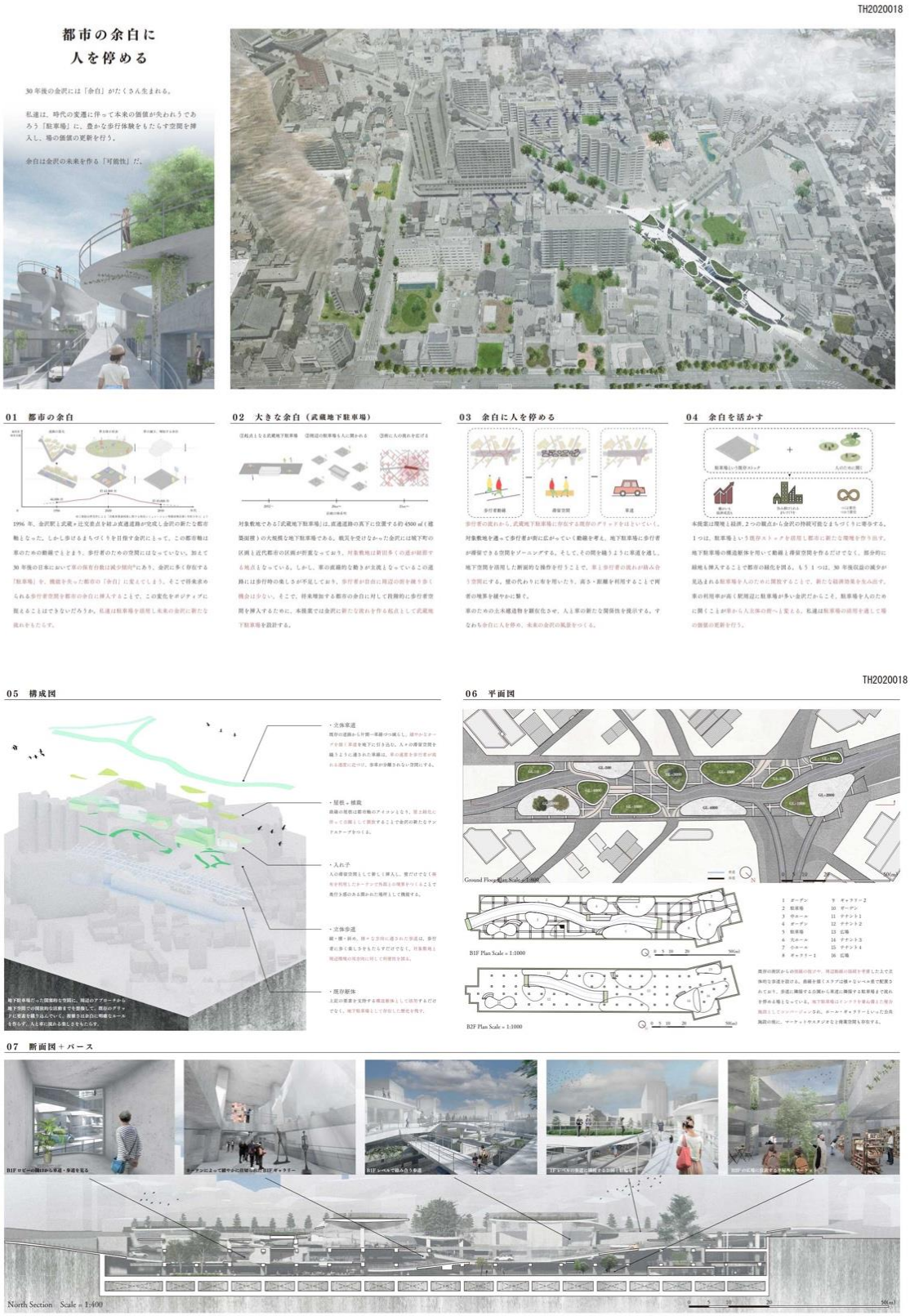
一方で、道が広がっていく、次の建物が見えていく構成というのは、歩いていて楽しい。何かすごい構築をするわけでもないけど、まちを新しく見せていくというところが面白い。

＜三浦 崇宏 氏＞

「広場」ではなく「ヒロミチ」という「道」を人々が集まる場所として捉えるという発想が、言葉やコンセプト的に面白いと感じた。

■優秀賞

作品名　「都市の余白に人を停める」



■作品概要

１９９６年、金沢駅と武蔵ヶ辻交差点を結ぶ直通道路が完成し金沢の新たな都市軸となった。しかし歩けるまちづくりを目指す金沢にとって、この都市軸は車のための動線でとどまり、歩行者のための空間にはなっていない。加えて３０年後の日本において車の保有台数は減少傾向にあり、金沢に多く存在する「駐車場」を、機能を失った都市の「余白」に変えてしまう。そこで将来求められる歩行者空間を都市の余白に挿入することで、この変化をポジティブに捉えることはできないだろうか。私達は駐車場を活用し未来の金沢に新たな流れをもたらす。

■作品提出者

氏名：土居 将洋 氏、山口 丈太朗 氏、小川 隆成 氏
所属：東京理科大学

■受賞理由・審査員講評

＜石上 純也 氏＞

新しい交通と都市の中での動き方という着眼点は面白い。一方で、金沢のまちとどういう繋がりを持った計画なのかという提案が弱い。このスケール感で、この大きな商業施設をまちなかに作ることは果たしてどうか、再考してみていただいたら何か面白いことになるのでは。スケール感、中に入るプログラム、元々あるものを残すのか、そのあたりを総合的に判断できたらもう少し説得力があったようにも感じる。

＜三浦 崇宏 氏＞

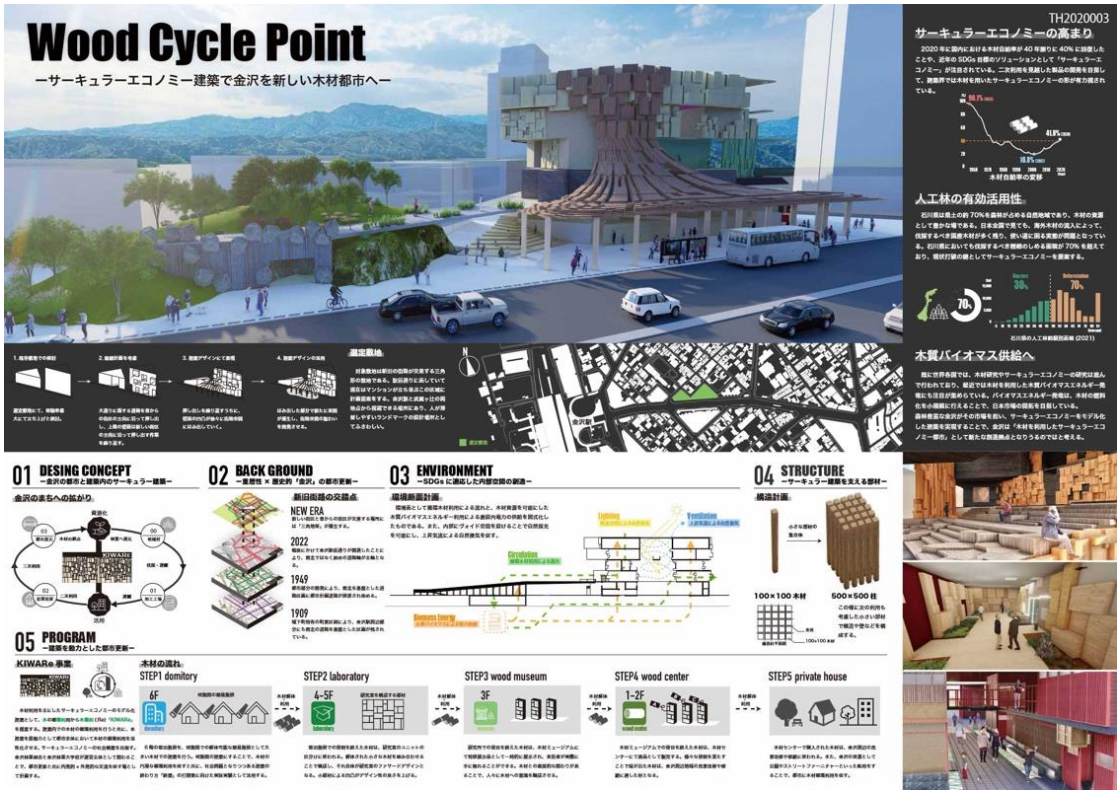
未来に対する仮説があると感じた。仮説というのは単なる予測ではなく意思。「都市の余白のようなものが人々の幸福に重要になるはずだ」というように、どういう未来がくるという予測ではなく、どういう未来を創ろうという意思があるところが良いと感じた。

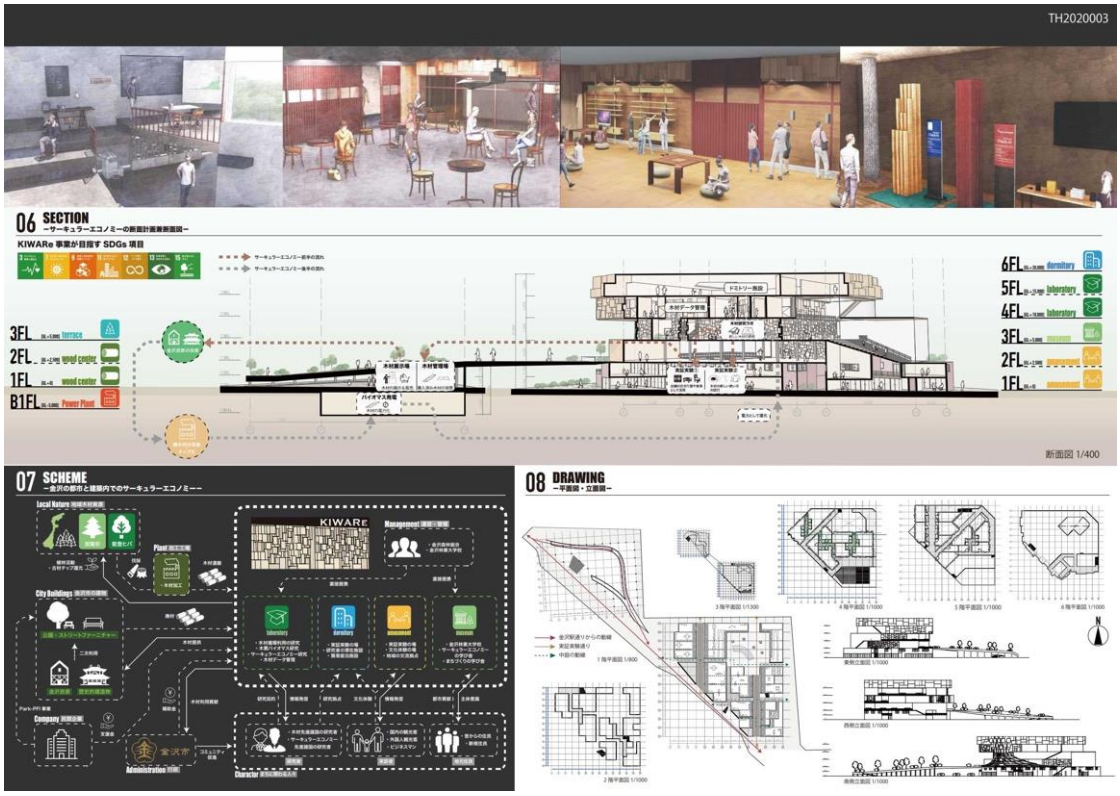
＜上田 利恵 氏＞

道路の地下に駐車場を作り、地上には歩行者のための空間を取るというこの作品は、見たなりにすごく良いなと思った。

■理事長賞

作品名「Wood Cycle Point –サーキュラーエコノミー建築で金沢を新しい木材都市へ–」





■作品概要

石川県に多く存在する森林資源を活用した研究やサーキュラーエコノミー建築の実践等を行うことで、金沢を木材都市とし、木材を通じた新しい賑わいを創出する。本提案では、能登半島などの間伐材を通じた大きなサーキュラーエコノミーの輪と、金沢周辺の民家などを巻き込んだ小さなサーキュラーエコノミーの輪を描き、それらの輪の中心となる建築を設計している。

■作品提出者

氏名：大塩 輝 氏、掛田 巧 氏、吉田 絵理奈 氏
所属：早稲田大学創造理工学部建築学科有賀研究室

■受賞理由・審査員講評

＜石上 純也 氏＞

プログラムや、これからの建築や存在意義という意味ではこういうやり方もあるかと思うが、一方で、作られた建築が今後１００年、２００年に残っていったときに、プログラムが変わっても残せる建築でないといけない。その中で、木造建築の魅力を新しい形で伝えるような提案があれば、重層的に歴史に残っても良いという価値観を審査員に知らしめることができたのでは。スタート地点としてはすごく面白いのでそのあたりをブラッシュアップできたら良い。

＜宮下 智裕 氏＞

建築としてはもう少し気を使った提案がしっかりあると良かったが、材料を使って最終的には民家に活用するなどのサーキュレーションの仕組みが、観点として面白かった。

＜上田 利恵 氏＞

今まで見たことの無いようなデザインが印象的で、木の材質の建物でこれを実際に建てるのは相当大変だろうなと思うほど、インパクトの強い作品だった。

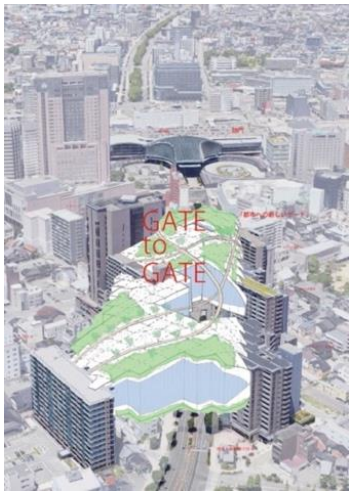
■みんなでサンドイッチを食べるように – 都市軸を形成する再開発の再考 –

作品概要：金沢の未来都市像として旅行客も住民もまちなかを歩くのが楽しく快適になるような徒歩での回遊性のあるまちをつくっていくことを考える。具体的に、高度利用建築の容積を地方公共団体所有の地域の敷地と提供し合う制度をとり、建築の形態としてそのような制度に適応した現れ方を提案する。

■十重二十重に循環する都市 金沢２０５０構想

作品概要：２０５０年の金沢にはさまざまな変化が想定され、地域内でエネルギーや資源を循環させるサーキュラー・エコノミーへの移行が求められる。そこで、金沢のまち全体に、人、情報、資源、経済を循環させるため、金沢都心軸沿いの主要敷地に拠点群を提案する。

■Gate to Gate「都市への新しいゲート」



作品概要：金沢駅から伸びる都心軸上に、鼓門に連なる新たな都市へのゲートを創ります。計画では３つの提案 ①公有地（道路）上での空中権の設定 ②「私」（寄生ユニット）による「公」（VOID）の形成 ③表層の公共化により「公」と「私」が垂直に折り重なり、融合して、意識共有できる場を作り出していく。

■一次選考：２０２２年９月１５日（木）

作品提出のあった１１作品において、金沢 JC 会館にて一次選考を行った。金沢青年会議所執行部による選考は、以下の８つの項目について、それぞれ５段階にて評価を行い、本審査・講評会に進む６作品を選考した。

＜審査項目＞

・金沢のまちづくりの歴史を理解し、
　次世代のまちづくりへ反映できているか
・デザイン力（デザインが優れているか。新たな価値が
　生み出せているか。金沢らしいデザインであるか）
・アイディアの柔軟性があるか
　（容積率の条件を取り払った意図を汲み活かせているか）
・デザインと作品に込めた趣旨（目的、ターゲット）が明確であるか
・受け手が金沢の未来の都心軸にワクワクした未来を描けるか
・新たな来訪者、若い世代がアクティブに活動する空間（受け皿）となっているかどうか
・歴史的な金沢の景観価値を踏まえたデザイン提案になっているかどうか
・新たな価値を生み出す場の提案（ソフト面）と現代的なデザイン提案
　（ハード面）の両面を同時に提案できているかどうか

■市民展示会　：

２０２２年９月２１日（水）～９月２２日（木）

一次審査を通過した６作品において、金沢駅東もてなしドーム地下広場にて展示を行い、通行人を中心に石川県内外からの来訪者による投票を行った。１日目は２３件、２日目は８８件、合計で１１１件の投票があった。

■WEB 展示　：

２０２２年９月１９日（月）～９月２８日（水）

金沢青年会議所公式ウェブサイトにて一般投票を受け付け、１０日間で１，０２６件の投票があった。

■本審査・講評会　：２０２２年９月３０日（金）

一次審査を通過した６作品について、審査員による本審査、講評会を実施した。講評会には６８名の市民が傍聴した。
一次審査通過作品応募者６組によるプレゼンテーション及び審査員からの質疑応答ののち、選考会を行い、受賞３作品を選定した。講評会では、入賞作品に対しての評価すべき点、更なる発展を求める点について、また全体を通しての印象として各審査員から講評が述べられた。以下、審査員講評、事業後の感想を一部抜粋する。

（講評順）

＜宮下 智裕 氏＞

全体を通した印象として、都市的なアイディア、都市のこれからのアイディアとしては魅力的だった一方で、金沢のコンテキスト（背景・状況）への落とし込みに、もうひとつ深みがあると、全ての案が説得力を持つだろうという印象を持った。

＜石上 純也 氏＞
色々な作品があった中で気になった所は、近代的に開発されたこのエリアを元々あった歴史とどう結びつけるかの提案が、全体として弱かったような印象。一つ一つのアイディアとしては優れたものもあったが、金沢のこの特殊なエリアにおいて提案する建物にどういう意味があるか、もう少し全体としてその観点がブラッシュアップされているとより優れたものになっていたかと思う。

＜三浦 崇宏 氏＞
私は、マーケティング、ビジネスの立ち位置から、上位３作品とそうでない３作品の大きい違いについてコメントをすると、未来に対するスタンスがあるかどうか。上位３つは仮説がある。仮説というのは単なる予測ではなく意思。どういう未来を作ろうかという意思があるところが差になっている。受賞しなかった３作品についても皆さんよく考えられていると思うが、ある種、どういう未来を作りたいのか、どういう幸福をデザインしたいとか、未来はどういうまちであるべきか、そういう意思に基づいた仮説が無かった、あくまで予測の元に作られているという印象があった。

＜上田 利恵　氏＞
参加された方の作品はどれも金沢のまちのことを真剣に考えたものばかりでした。まちの活力が私たちのビジネスの分野にも関連してくるので非常に聞いていて嬉しくなった。若い人がどんどん活躍できる地域になることを願っているし、私も皆さんを支えられるように頑張っていきたい。

■審査員の総評

＜株式会社石上純也建築設計事務所 代表　石上 純也 氏＞

挑戦的なコンペだった。現代の都市開発の問題としてあるように、これからの経済活動とこれまでの歴史性をどうやって都市の中で共存させるかという意味で、すごく良い題材だったのでは。一方で、今後の都市の在り方は簡単には考えられない。特に金沢の地域性とどう結びつけるかというのはレベルの高い課題だったし、難しかったのでは。

僕が今回のコンペに期待したことは、これまでの都市開発は、都市スケールを超えて行われていたことが割と多く、京都駅などもそうだが、今までの歴史的な建築スケールと近代建築のスケールは、成り立ちや大きさが違うことから、今後どう結びつけていくのかが課題だと思っている。このコンペは良い題材だったが、未来の都市空間に対しての建築スケールの提案が少なかったと思う。現状の道路際の高層建築に対して、今後どういうボリューム感で建築が建っていくのが良いかなどの提案がもう少し見られたらより面白くなったのではと思う。

＜金沢工業大学建築学部建築学科 教授　宮下 智裕 氏＞

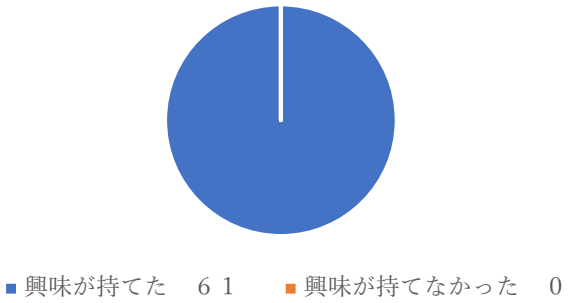
コンペタイトルを聞いたときに感じたのは、ちょうど戦後、高度経済成長以降、都市開発が行われて５０年近く経つが、５０年というと都市の在り方が随分変わり、当時の建物も老朽化し始めている状況。だからこそ、近代の開発についてイエスかノーかということではなく、もう一度改めて考える重要な時期でもあり、それが必要になってくる。

特に金沢は難しい。開発と保存が他都市よりも均衡されなくてはいけない一面があり、そういうまちだからこそ、考えていくことで金沢というまちが、日本の中でもひとつの光を放つまちになったらよい、という期待を込めた題材だったのでは。その中で色々なチャレンジを見せてくれたが、全体を通して、そこに対してさらに挑戦してくれたらワクワクしたものになったのでは。最優秀賞作品は、そういった課題に対してシンプルに答えをだしてくれたことが、私も含め審査員に受け入れられたと思う。

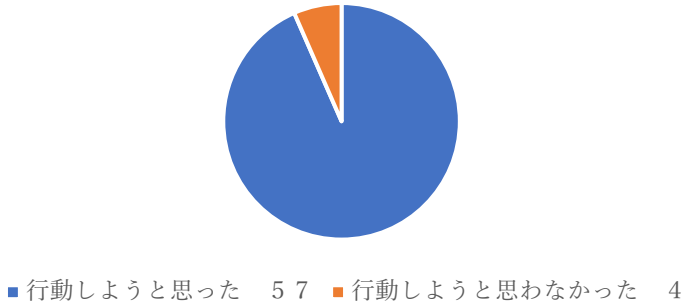
一昔前から都市計画はなかなか難しくなっていて、線を一本引いたからと言ってそこに道を作れば良いという状況では無くなってきていると思う。小規模であったり、さらに俯瞰的な視点であったり、様々なレゾリューションで都市を考えていきながらデザインしていくことがこれから求められる。極小なものから極大なものまで見ていく、その中で更に歴史、未来、ひと言で答えが見つからないことについて、こういうコンペも含めて機会を重ねながら、皆さんで考える、意見を出す、議論をすること自体が重要なプロセスで、都市を輝かせていくのではと思うので、良い機会であった。

■講評会参加者アンケート分析

1、講評会に参加して、未来の金沢のまちづくりに興味がもてましたか。



2、みらいのまちづくりに対して自らが積極的に参加・行動しようと思いましたか。



3、その理由をお聞かせください。

※回答いただいた内容を事務局側でまとめました。

（行動しようと思った理由）

・金沢のまちがどうあってほしいか、ということを考える機会となったから。
・大好きなまち金沢を、より住みやすく魅力的なまちへと自分たちでつくっていきたいと感じた。
・様々な視点から金沢の現状を捉えていた作品と接し、自分が気付かなかった金沢の良い点を気付くことができたから。
・誰かがやるという意識ではまちは良くならない。今回のコンペのように、未来に向けた希望、こうなってほしいという考えを発信していくことが大切だと感じた。
・既存の考えに捉われず、金沢の歴史を尊重するような提案が多く勉強になった。
・高齢化、人口減少を迎える時代において、自分自身が何かできるのではないかと考えるきかっけとなったから。
・ワクワクする提案を聞き、金沢の魅力、金沢の持つポテンシャルについて深く考えるきっかけとなったから。
・町の特色を活かす土地づくりをする案をしなければ、どこにでもある景観になってしまうと思ったから。

（行動しようと思わなかった理由）

・金沢の歴史について知識が薄く、まちづくりについて今まで関心がなかったので、すぐに行動に移すことは難しいから。
・今回のコンペの趣旨の分野での「まちづくり」という意味合いでは行動にまで発展できないと感じたから。
・興味深い話まで面白かったが、実際にどう行動すればいいのかは分からなかったから。

４、金沢駅前から都心軸にかけて建設される建物はどういったものが相応しいと考えますか。（自由回答）

（建築・デザイン面）

・スタイリッシュなもの、端正なもの。
・景観を損ねないが、行ってみたいと思える施設。
・高層ビル。
・建物ではなく、広場。
・景観も大切だが、高さ制限は必要ないように感じます。
・趣があるなかで斬新なもの。

（都市空間として）

・歩行者自転車優先の分割されたボリューム。
・都市間の交流をうながし、金沢をもっと発展させることができるような施設。
・片町と駅前を繋ぐ場所になるもの。
・お城までの迎賓的な趣旨と歴史的街構造への誘い。
・地下鉄の構築。
・公共交通機関（地下鉄もしくはモノレール）をもっと発達させた上でターミナルや観光客･地元民などが交わる場､活近代的な建物が相応しいと思いました。
・歩いて楽しめる繋がりがあるのはいいと思った。
・ライブハウス。
・キムスコや加賀五彩など、表層的なものを乱用するようなものではなく、ヒロミチのような都市の歴史を理解し、街そのものにコンセプトがあり、それを体現した建物。

（金沢らしさ）

・金沢の未来を考えながらも金沢の今までの歴史的要素が含まれた建築。
・歴史に紐づいた建物、歴史と調和した建物。
・金沢らしい木造建築物。
・何か奇抜なものではなく、金沢らしさを表現しているもの。
・観光客、街の人々にとってバランスの良い考え方のあるもの。
・歴史を踏まえた金沢の魅力を市民と来方者が共有できる建物。
・金沢の玄関口なのでワクワクするものが相応しいと考えます。

・金沢の街並みや景観を崩さないような建物の外観。
・金沢の文化が楽しめるもの。
・これまでの歴史や文化を壊しすぎず、新しいカタチの街並みに期待します。

（雰囲気）
・ワクワクする場所。ドキドキする場所がいいです。
・みんなが笑顔になれる空間。
・歩いて楽しいワクワクする空間。
・人のハッピーにつながるものであることがふさわしい。
・小さな変化を楽しめるもの。
・賑わいのある人流をつくりだせる建築、賑わいを創出できるもの。

（人を視点に）
・人のための空間。
・もう少し人のための空間に開けると良いかと思います。
・人混みになりすぎなければ良いかと。
・人が集まる都市軸。
・金沢市民、他県の方が交流できる場所。
・回遊性のある、市民に開かれた建築がいいと思います。
・ひとがゆっくりできるスペースがある施設。
・皆で考える事が良いと思う。

■市民の声（市民展示会でのインタビュー）

＜金沢市民　（６０～７０代女性、３０代男性ほか）＞
・駅前の一等地だから良くなってほしい。
・都ホテルの跡地に何もしないのはもったいない。

＜旅行者・静岡県裾野市３０代夫婦＞
・まちを良くしようという取り組みは良い。
・静岡では潰れたデパートの跡地にパチンコ屋が立って残念に思っている。
・裾野市ではトヨタのウーブン・シティを建築中で、市民への説明は十分とは言えない。市民と市長が一緒になってまちを盛り上げようというのは良い。

＜旅行者・愛知県名古屋市３０代建築設計士＞
・一次審査を通過しただけあってどの作品も見応えがあった。

■コンペティションを終えて

これまで金沢の経済界では「都心軸を今後どうしていくべきか」という議論と提言がなされている。学者・知識人たちと密接な協力関係を構築している地元経済界が行政と様々な面で協力し、さらに経済界自身が金沢の文化・歴史について高い見識を持っていることにより、今日の金沢の発展の中心的役割を担ってきた。今回、金沢青年会議所としてコンペティションを開催した経緯として、長年金沢を支え続けてきた都心軸、とくに金沢の玄関口であり多くの市民と来訪者を迎える金沢駅東の一等地ともいえる場所の具体的な未来ビジョンがないことを危惧したことにある。具体的な使用用途については所有者の意向によるものであるが、まちの活性化を考えたとき、私たち自身がこの場所をどうすればいいのかを考えることは重要である。その際、具体的なビジョンを描けない原因の一つに、都市景観条例に基づく高さの制限があるのではないかと考えた。金沢の経済界でもこの部分を題材に「高さ制限の撤廃をするべきか否か」を議論がなされたことは記憶に新しい。

本コンペティションは、都市景観条例に基づく「近代的都市景観創出区域」に指定され、隣接する伝統環境保存区域との調和、重要眺望点からの眺望、ランドマークとしての見え方が考慮されるエリアにおいて、「高さ制限を超える高層建築物が、金沢の新たな景観的価値になるのではないか。」という仮説を検証するとともに、未来の金沢に相応しい、まちのビジョンを描くアイディアコンペティションとして開催した。寄せられた作品はいずれも制作者の金沢に対する思い、敬意のようなものが感じられた。会場で観覧していただいた市民にもその熱量は伝わり、未来の金沢がどうあるべきか、どうなってほしいか、そして行動に移していく気概という主体者意識の醸成は、少なくともその種を撒くことはできたのではないかと考える。特に、実際に提案される作品を鑑賞し、そこにあるテーマや作者の未来像を共有することは、一人ひとりの思考がより整理され、考えるきっかけとして適切であった。

■金沢に高層建築物は必要なのか

本コンペティションで検証した「高さ制限を超える高層建築物が、金沢の新たな景観的価値になるのではないか。」という仮説については、作品募集要項において「より柔軟な提案を求めるため、既存の容積率にとらわれない建造物とする。」という項目を提示していた。結果として提出された作品に「高層建築物」の提案はなく、今後さらに加速するであろう人口減少や車社会の衰退が原因で生まれてくる、道路や駐車場など、まちの余白を都市空間としてどう活用するか、未来の金沢市民の生活、息遣いをどう捉えるかという部分で、未来の金沢のあるべき姿を提案していただいた。アイディアコンペティションであるので、すぐ現実の金沢にこれら提案が反映されるわけではないが、３０年後の未来を見据えたときの仮説として各作品に共通していたものは、

① 郊外の大型店舗、ネット販売の拡大など、都心に対しての経済性（床面積）に対する需要は減っていく。その需要が減っていく際にできる都市の余白の活用の仕方が重要。

② 駅前の都心軸といえども、金沢の歴史的な文脈を捉えず継承を重ねていかなければ、他の都市と同じようなまちなみ（都市空間）となり、金沢独自のまちの魅力がなくなってしまう。
③ 金沢は文化とまちなみに重きをおいた、人、学び、交流のための文化都市であるべき。それが金沢のまちの持続的な発展に繋がる。

この３点であった。このため、あらゆる制限をなくし、自由な発想でアイディアを求めた本コンペティションにおいて、「高層建築物」の提案がなかったことは、高さ制限撤廃の必要性の可否について一つの指針になったのではないかと考える。

■まちづくりにはビジョンが必要

本コンペティションを通じて、金沢駅建設から武蔵ヶ辻までの道路が開通する約１００年の間に積み重ねてきた歴史に照らし、未来を見据えてどんなエリアとして再開発していくのかは、大変難しい課題であることを改めて認識することができた。しかし、社会情勢の変化は著しく、その時代にあわせて変幻自在にあり様を変えていくことも、また重要であると考える。コンペティション内の講評会にて「どういう未来をつくりたいのか。どういう幸福をデザインしたいのか。未来はどういうまちであるべきか。そういう意思に基づいた仮説が必要である。」という旨の審査員からの発言があった。まちづくりには未来像、つまり「まちのビジョン」が必要なのである。

■金沢らしいまちづくりとは

これまでの歴史とこれからの経済活動を都市の中でどう両立させていくか、金沢の地域性とどう結び付けていくのかという課題が審査員から提示された。今回、最優秀賞を獲得した「ヒロミチ」は、金沢の都市構造の成り立ち、対象エリアの歴史を捉えていた点が評価されている。新たな時代における新しい価値をビジョンとして描く際、積み重ねてきた歴史・文化という揺るぎない土台を踏まえる必要があり、それによって形成されたまちなみが、他都市との差別化を生み、金沢らしいまちづくりと呼ばれるのである。金沢らしいまちづくりには、まちづくりの主体者たる市民が金沢の歴史を尊重しながら、あるべき未来像を捉え、決意をもってまちづくりに参画していくことが必要である。都市とは人々が集まる場であり、人々の活動・営みが文化、経済を形成する。つまりまちづくりの重要な資源（資産）は人（市民）であるといえる。また、金沢及び近郊には文化・建築・都市計画・環境・観光、様々なジャンルを専門的に学べる高等教育機関が多数存在する。その恵まれた環境を活かし、若い視点・柔軟な発想を積極的に取り入れることが可能な都市である。金沢らしいまちづくりを進めていくには、まちづくりの主体者たる市民と産官学からの様々な分野の意見が議論されるそのプロセスの中で、金沢の歴史・文化を土台にある未来ビジョンが描かれる。その「議論される土壌」が今なお金沢に残っているところも金沢らしさといえよう。

■まちづくりの課題

本コンペティションにおいて、金沢の都心軸として、また、駅前から武蔵が辻のエリア全体として、金沢の文化をどういったかたちで継承し、未来のまちは、どのような公共性を持つべきか、ということを具体的に考えることが重要であることが示された。それは都市の豊かさ、つまり、人と人が交流する空間をもつこと、自然との調和を保ち、環境に配慮した都市であることがこれからの社会に求められていることを意味している。一方、実際にそれらを都心軸に実現しようすると、そこには経済的合理性が求められる。平面あるいは低層建築物では経済的合理性がなく、事業者にとって採算が合わなくなることも事実である。誰かが負担するだけの方法は金沢の持続的な発展にはつながらない。例えば建築物を縦ではなく横に広げるための容積率の緩和、建築物の区分地上権売買による容積率移転を促す制度や、まちなかの余分な駐車場、活用されていない広場、歩くだけの歩道、あらゆるオープンスペースについても地権者や様々な規制との調整が必要である。このように、未来ビジョンを実現するには、それを支える新たな制度や既存の規制改正などが必要となってくる場合がある。市民と産官学の連携のなかで、金沢の未来にとって必要な条例整備が求められる。

■金沢らしいまちづくりを目指して

本答申を作成するなかで、金沢の歴史的重層と景観保全への取り組みにより、金沢という都市の魅力が形成されてきたことを改めて感じることができた。そして、そこには常に時代のなかで「金沢らしさ」を追い求め、果敢に挑戦してきた先人たちの活躍があった。公益社団法人金沢青年会議所では、明るい豊かな社会の実現のため、我々自身を含めた市民一人ひとりが金沢に誇りと愛着、まちづくりの主体者意識を醸成することで、歴史・文化そして人の想いが十重二十重に築かれる金沢を今後も継承し発展させていく決意を新たにし、総括とする。

発行者　公益社団法人金沢青年会議所
　　かなざわの経済活性化委員会
発行日　２０２２年１０月１９日